枕草子抄在東抄

第
一部
滋賀縣立膳所中學校
冊
號
之部

138/
vol 1

清少納言枕草紙裝束撮要抄目録

搗の直衣乃事　附尼一下襲衣狩衣細長ホウ
二藍乃事
香のうちきの事
卯花の衣乃事　附柳の衣花事
二三位乃袍をうつかし花葉ゑ深る事
六位蔵人青色乃事　附青白橡紺塵山地色奥陸の号又黄櫨深花浅袍の号
蒲萄染の事
あハひむらひの事

東京帝国大学図書館蔵書

皆練（カイすり）火色乃事

ひのさうぞくの事　附このゐさうぞくしゃう

古今冠異なる事

細長汗衫（カザミ）袙かつきぬうへの衣大口とう袴指貫の事

たこ巻の事

草帯の事　附布袴　褶（アコメ）　高の沓（くつ）　靴（くつ）をくる

裙帯（クタイ）　領巾（ヒレ）乃事

けいしぐりの事

清少納言枕草紙装束撮要抄

清涼殿の世とりはをこといへる所

かうらんのりとよまき絙（カビ）の大なるをへく榜

乃いうぐくわりしろきえぐされ丈たるう

なるをいとはくさしられバうすんだん

りとまでこぼ咲るふ豆つりと大納言殿

榜のるかしをこしるるうなるよこれ

紫れ指ぬきをろきはぞをうへよれ

あやのいとあざやうるいぐしくまりう

ゑさうてゝ

義按榜の直衣ハ表白裏蒲萄（ヨビ）なるもの

かれをひゑれさしぬき白きはぞといひて

武人曰ハ乃の反わ
と　但くれぬ井
ふりふときハ反乃こま
うゝず轉語なり

をゐ蓋也色和訓くきるゐねとよめる
る長蓋ハ光ぐまる訓なりといへり
そ色うひをちありと
小ちかえといふ和名小一条の大ね
どの光ハ家ぞうといへる説
香のうすりの袖さあねれなゝしおゝしち
しぬきこきすたうの光袴よりうる云
ゆきひとへれいとあざやかなるを云ひく
義按香乃うをりのを夏のきぬなる
べしそき者いろを下掾紅して
英を海を文織ようゝ三条装束抄よ
ゝくうり又武人曰香文ハ者れたきを云こ

四日癸酉晴入宿仲基
入道来談古事知足院
殿仰着直衣汉丁玉漆
ゝる香惟著之ゝ

ゝる衣ゝりうゝゝる名也上乃袴ゝとき
め紀する物といへる而よけさうして香
よゝゝゝる衣きゝるとゝゝゝゝゝ
只香衣とゝく黄ゝゝく染るハゝゆゝね
事なりとゝゝゝゝゝこき蘇芳れい袴と
ハ指貫の下袴なるへし

木の花ハといへる袴

まつれゝへさゝ紫野ゝわゝゝをきあや
しの家どもおどろなるかきねおどよゝを
ゝろう咲ゝゝるゝをれゝしき袴きいろの
うへよ衣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝちだゝおどよゝひくいとおゝし

化粧

義按姉袴卯乃もるれ衣よゝよへ京綱
ゝれゝ裏よゝきゝり卯れ花の衣も表
白裏青卯乃ゝゝ友よ青色れゝへよ白き単。
かさゝゝといひつげゝる下乃袴乃ゝ物ハ
といへる而よ所の花の青いろゝかさ
ゝを青ゝ紀だゝりひきゝきゝるは卯
れゝなの袴根ちゝうおぼゝく郭公も
袴よゝくれぬべうおぼゝといへるに同し
ゝなり又表白裏青なゝと柳の衣も
いひく十一月より正二月まで色を
ゝゝ他柳のきぬれ時も柳と紙物
ゝ卯のゝるれ付ちゝれ花と紙物

ふしくそのほとりと武蔵とみそうら
まもるといへる歌
あらうらしなどいふりの海にてこやさ
まもる中まをいとけどをくて三位二位の
うへはさぬをひるおりむるをぞ紫をぞ
ふひこのほとりるめれ
義按衣服令は一位深紫次三位以上
淺紫衣と見えたり後世作
皇紫ゆるをるがゆへまらうしの紫
とせんじくそきまてそわ長をぬし
るまて深るるやあれ古制のあら
まりぬるろれかんがへまもるん

うしとゐるをり
めでらるものといへる歌
六位の蔵人へそなれめぐるそれいそぐ
き君をおれども えをさまはぬ
あや濃袍をんは海をくさるるまい
ろすぐるかどいとめぐるれ
義按まいろを青白の櫟といへる略
名すしてなく麹塵乃別名也それ
鞠塵は名を禮記の月令は注は出
らうえ又延喜縫殿寮式は青白櫟
と載られるみ也又山嶋道奥陵龍本
などいへる歌を地さぬの夢也或人白

奥陵とハ
天皇ゝ御料といへるあり海ゆる色し
ゝうゝをぎよれうと名目すべきなり
めり奥陵の字を用るゆゑに奥陵と
いひくんゆゑ代也名目よつきく文
字とゝ也ゝ又錆物ゝ麹塵黄櫨深
奥陵おどいへるゝ古き俗名目ゝ
るべしと又錆物ゝ麹塵黄櫨深
同物のやうゝ載ゝきてゝるゝ甚あや
まり也ひとゝせ野宣卿と恐ゝ
色を論じて後二條関白記　江次第
雲岳抄ゝ日本とゝく一拍ゝあゝべ

依名目替文字之類
熟線綾　延喜織部司式
紫素諸抄縮線綾裏と
ある色なり清で可讀と
也ゝ
熟紙　延喜式部省式
後世宿紙と書ゝとし
日ゝ

る事をゝあきゝめし色あま祢
く人のゝきる和也彼卿も我も盛ゝ
ゝしゝろかればゝのりてゝし　れさ
事を論じ已不奥となりゝる事ぞ
くやしきゝ文黄櫨染を弘仁以来
天子ゝれ正服ゝして　上皇こいへゝも
著御の例なし故ゝ　天皇の服御
ゝ位色ゝとゝる色也柞麹塵を
天皇御の御袍ゝがゝゝ極禍と
き代ゝ下しく常ゝ用ゝ
ゝ代りてんゝ海ゝをくきゝる色
いろすゝとゝいゝ但ゝ上着

御の日にも表をきずと、侍せ辨要に
こしらへ天なるもあつらハ極臈に
かぎらず第二の蔵人も雑しき
波ぐを猶らく着用乃例あり又
上皇皇太子よりも親王公卿侍
臣六位已上野非違の時なべく着用
有例多しと
むかせさへあるをいとめでたしと
いへる源
一の人非ではありき春日まうで君び深の
織りのすべく紫なるを君にとくめで
さくてそあれともかもいともかとをむらさき

の花非中にハかさいなさうすこしあく
きいろをめぐらし。
義按衣服令義解云蒲萄者紫色
之最浅者也とみえたり又織蒲萄ハ
経赤緯紫なり故に紫なる色く
よりかきにたるまでいひつげける
あれど又古源にあげる色いろの
うへにあろきひとへのかさねつづきたる
などいへれハ奇妙なれ文様でもあり
又下襲まて表裏かけて色ひそあ
といへるも表すまう裏花田なる
といへり武家ひそめのさしぬき武

裏表びぶ深。又表びぞめ紙ねりおりて一ぢ
よていへるとまうち去るべし
小忌のきんぐちを外よねくこの
いひおどすといへる説
小云糸といふがあるひをのこけるを芭
をむをぐやといへばさかるこの中ねうう
てけくろ山藍ノ心くろくてあるむを
あしらの山ねれこはまるを
いうれるひもの　くれるうん
こいひく清が納を小を清よかりうく
うまをこりあくふむすべる組おれい
かざた日蔭蔓ノ心　ゆるくたうれ

裏指そきあるひをハ小忌の右れよりと
よつくるをのなり　延喜式　踐祚木曰
小齋親王以下皆青摺袍五位以上紅
垂組淺深相副　とみをくうり結るを後世
蘋苔の濃淡をよかむをびあり
用ひうり又清が納言が所よあハ
よむを麁るこはゆるひくも又こけ
ぬとりあくろよいうり去あて清也
桃華葉葉り松の横目れ扇の
こぢくる糸れあまりをあびむをび
月くくといへる事ありあまくよを
色ひていとおりくーを去たうに

伊勢物語をむうーんよも
あくてくくろ人りを
う　むの結をはくをよ
りてむすべきばをく
の後をあくんをぞおり人

政事要略衛門府
風俗哥云
多多良女乃花乃
加以(カイ)子称利(ジ)好(ヘヤ)年花
滅(レ)紫色好年夜

をなしくん
細布の平緒つをくきよげなるか
のこれりくまなくをいとるまめらしといへる歌
行事の殿人ぬいはりがさ。ものすりこ
とまさうにあり
義按搔練後稱念院関白狂衣束抄
曰搔練下襲紅色下襲各別物也共為
赤色云云 同抄曰即無智祕抄曰紅のいろは
下重色ないはりとかちくるりのなり
紅色とハ裏おりくとも表おりの
まて中重と入うる也ないはりとハ
(紅衣の中重ハ袍と入うる袍ハ袍なる)

しハ袍れをりたれまてをりへなる也と
ふくくう
(撥景舎)ちばけいちや表衣よまいりすハ袍の事
かどいへる歌
ぜぜきえんよ和をたひの御さうぞくれ下が
きゝなどひきらさ袴
義按ひのさうぞくとハ東帯の事也
宿衣袍衣束衣に対して畫れ裝束とい
へるあやむらしをれゆるしなくく
宿衣直衣よてを 主上乃ぬまへ出
仕しの袴ぐる事也 宿衣とハ衣冠の
事也 衣冠袍衣をこのねさうぞく

こく臨よはあるべき也ひろさうぞく
北条海ちく說のこともすでよ下
がさ袖ぐどひきちさきてうとかきば
みでしは後東帯とハさそうう
わがしぎよ見ゆる袍といへる説
面のいくゆる日ちいさき馬よのうて歩
駐ちうう人北かううもひしを袍下
がさねを元むとれよなりたるいうまび
しうん
義按いうよ面ちうをとも今の世北
かうりなうばひしをまいまし
と今北しとなるをちうしんとこく

あげうう
阪弁の沸りとうりて紐殿可ぶなど
やうあるを袍をちろきちたしよはみ
くといへる説
さぬるどよすでろるる名どもつけをんい
とあやしきぬの名よはをるがをさを
いひつ麁しるぞかさみをちうるがといへ
うしおのもうハのさるやうよるぞうきぬ
ハうしうの北きぬとそれくめされどそれ
をりろうの人北さるをのるをバうへ
のきぬれを袍さうん毎下がうねも
よしうれかくちるがさうくらひろけ

れぞはゆいとあぢ紀をしぼしぬき
もをそあしさぬをしいさ屋うのゆ
はあしゆくろかどをいへうし
義按細長を切りぎぬのくびうをれやう
よをてを三をこうりの物也といてうをを
りそ細長いさをいひつ屋しといへるなる
べしさをこの細長かでしこの細かが
などを或記よをこうりかざみ下れ
張うさみかといへるホよ長を作ぐ
樣長ををくちぐ朽葉をいひよれ
張作物ホの別尚するにといへるホの
中よ樣のうざこ萠黄こうむいかど

いうぢをかざみかがくをりひさてといへ
里あを紙りくうさえををりかがといへうし
といへいなる屋ぐ新葉集兼昌が哥よ
りろ人をホのをべある式ひ女るがかざみの
すうをれかうき世ぞうしとををうり雅をを
蜻蛉東物よ公用の次第うり武絵まで
ををハしくをるをりみうきぬ下の張
ううきぬハといへホりあうきぬをひぞ
めをををぎちをを屋をうすいろの紙
くををうり紫松白物よ上爵不謂是
非二三位典侍号上爵着赤青色候御
陪膳也とんををるも是也雅すを仕長

東物曰上臈の女房れいろをゆるといへ
ども色いろ赤い袴れをうめ〻〻きぬ
地ぞりれ紫とあるありといひ伝す
紫式部の日記よも秀しくみそくそ
されど仏書のことめよるいさうんあり
て源氏よりうる注釋までも用ひ
給へざるも和名抄より背みとあるし
て和名抄〻きぬと訓じ形ヲ如ニ背ノ
云腰襦之袷衣ありこれそうもて
とりてかぞ〻〻衣ハみじ〻きぬと
〻そいとめといへる成べし又うへの衣
和名抄上袍和名うへのきぬ一ニ朝

服とみそうう又下がさをよしとは
名目よたゞひかくうへのきぬれ下がさ称
かきどりの下の袴をさがさをといい
へる而よきハ袴くだかいねりがさね
すわうがさ称かりハあねあるう
さをとみそうう又大口おがさうくち
廣々れバとハいへ武徒今ま
みとあるをあねどり小口乃袴
よ対して大くちとしてすや甚くち
れ袴を　主上所鞠あそびすとき
名所れ大槻松物まそくう
又袴いとあちきなりとハ神代巻より

投テ其褌こき捨開蠶神といへるかん
よてあらうきなしといへるよやえさしぬ
きうしぎきぬをぐろなどいへしと
八位言侍詰一員有文章也和名抄よ
八奴袴とも云るしてちしぬきと和訓を
り雜令よ官戸奴婢三歲以上每年給
衣服條よ布襖袴とそくうを
などによりおこれるよや西宮記よ古時
有制臣下不用近代五位以上及昇殿六
位皆用之とみくうを其古時有制とハ
しく奴の袴なり拵へよや蓋後世織物
後年絹等をりて裁縫し若壯より老

者よ到るまで深淺をとしち
上皇親まうたしめたり拵法家
よいくりて地文織やうの品く裝束
法抄よくハしを云るを張ひこり
一代制とおもり云られを今ようく
色き事聊もなし但此書の下九條
さしぬきハといへる和よひろ花のこき
うすき夏ハ二藍いとあつき比表ひ
表色しうを深しを也こそくうり
又まさを裝束抄よ夏のさしぬき
二藍多り色うすいろ織あさきあとん
いろとくくうり夏ひしのい濃しる

とハおもうハいろとりてゝ
うゝ所まし紀りのといへる歌
女のたがさうぞくなどよハあゝてゝ引
ゝゝそゝゝゝ
義桜引ゝゝゝとハひきわげゝゝ
也男ゝゝ東帯するゝし物の三
角ゝ和ゝはゝゝといつゝ長かんゞへよ
をなゝうんゝゝと変よあげゝゝ
宮さゝ降てといへる歌
又位を四位も色うゝハしゝゝゝゝゝ
ゞよのきぬゝ長いときゝゝふくかゝの
おびゝゝゝゝゝきゝゝとのゐをゞよひき

ゝゝそてゝひゝゝゝのゝしぬきも宮し
ゝゝゝ深さ海ゝゝゝをきてあてめの紅
なゝゝをどろくしき山ぶき紅葉て
ゝゝゝさとしゝゝふ風のゝく吹く
よこゝ藏ゝ宮と吹ゝくれハすゝしゝゝ
ぶきくあ紅をゝゝふゞゝゝくハなど
乃きハ海ぐゆきれいと白くゝゝゝゝ
ゝをおしゝゝれ
義桜かゝゝゝ帯のゝゝつきゝゝとハ有文
の帯と宮ゝゝ 腰帯類 和名抄ニ曰唐衣服
合云草帯玉鉤注ニ云合桜草帯以
其所附金玉石角等為名有白

和名抄曰金隠起帯
唐國薄令云左右傘
吾木將軍各一人紫
柄襠金隠起帯
後二條關白記寛治
七年三月廿日丁酉
霜降晴卯時裝束辰
剌參六條院子櫻萠
二ツ下重紺地平緒螺
鈿劔鑒物隠文帯云

玉帯。隠文帯。馬脳帯。波斯馬脳
帯。紀伊石帯。出雲石帯。越石帯。斑
犀帯。烏犀帯。散豆帯等其體有
純方丸鞆櫛上等之名草帯是其然
名也とゝ云くゝうゝ又このねすぐさゝ
ひきくゝあるをてむくされぬさゝぬきと
ハ是布袴といへなるべゝ雅そけ裝束
物よりうこの事さぬさゝぬきうれ
ハくくさく其うへよりさがさゝきて
う色のきぬよりたうておびさ
高ゝくをもれなりとゝくゝうゝあのこ
めのおなしをとゝろくゝしき山吹と

出してとゝハ色紅れるひく黄いろよ又
ゆるといへるもやトの活ひゝへハといへる而
よ色黄ぐみゝるむとゝへるどゝくゝハ
ふづきかゝしといへるよ同し又寶物集よ
紅の衣乃波のいろかれをはてハくちぐと成
ぐるかゝしれと右大弁親宗のよめるゝ也
其ゆとめこハ赤染の略訓なる歟し而式
も紅ゝるゝ色なりあく式りく武りしぎ
武藤色なるも染あこ先といてるあこめ
れ字延喜式よハ草の褐袷褐とゝくさ
ゝ其外裝束諸抄多ハ袖乃字をとりち
ひ武も袖れ字を用ひる文字乃こゝろ

よよれバ延喜式可なしんの歌うびぬべ
又ゑぐひのうくいはおどれきハまでゑの
いと白くうつくしうまうとあきバ靴も
れときうくくるや騎馬のときゑでゑ
用ひざるやうよおぼうこうりのそゑよ
あげうう

御經乃ことあをれうせおうし
まうんとていへる歌

采女八人馬よのをくひき出りまする
ごの裳。くさい。ひきぃ。おどの風ふ吹やしれ
うるいとおしぶぜんとうう。めいくす
しきぎまさがうる人なりえびぞめれ

をり袖のうしぬきされバあげ正ハ色ゆう
さきよりうるとと

義按裙帯を肩よりけ領巾を項の帷
ちんよし或記よみくうり今の世よハ行り
とものさくおよむぬなり又女乃さしぬき
名る事ハ色馬よのれど也いすへを
掌侍命婦をるよ拭まる例あり又
ちげ正ハいろゆうさきよりとハ延喜
彈正式ふ元婦人得著夫衣服色と
いへるトんふよて采女豊前ゑ衣び染の
織物れうしぬきゑるとたくふきて
いへるよや

裙帯 北山抄女禮服
二尺巻 其裙帯紫緑
半合 如帳紐兩端
縫形不用簪用蔡
是位驗也義按衣
服令云紕帯是也
乎領巾 延喜縫殿
寮式中宮春季篇
云領巾四條料紗
三尺六寸 條別九尺

上乃座まつりの儀といへる中ニ

けいしゝぐ川。おどれ緒とすげさせうゝ緒を

させかどりてさハぎ

義梅 けいしゝぐ川とハ扇ヨとうげり

和名抄 皆の部 山槐記 多すとみ

ゝうよれハ漆ぬりの乃あしざをいゝ

よやゝ古き賀茂海つりの歌よりもなを

ゝう 枝あゝぎといへる座ニ言きけい

しをさんてきゝれバといへるもおれニ

てよくきこえゝうり異邦のおこうり 晋

文云 日本之推ゞ事ニよりてゝ 後ゝ 地

一座ニ上乃座ハ文かれバ発端ゝ

かくべきを至がおそる 飢而ニ衣服乃

事ニて事をゝで先て其余乃ことハ略

しゝるふ武人地儀分明なゝざるニ

ニまてゝづゝれしを又ゝてゝ云る

ゝ乃ゝ

清少納言枕草紙装束撮要抄 終

享保十四年己酉卯月下旬　上坂勘兵衛源兼勝發梓

皇都　四條通　京極西入町

好古師校合後加朱墨
一見上坂氏好古堂書籍
享保乙酉年秋仲
門人多田義俊書